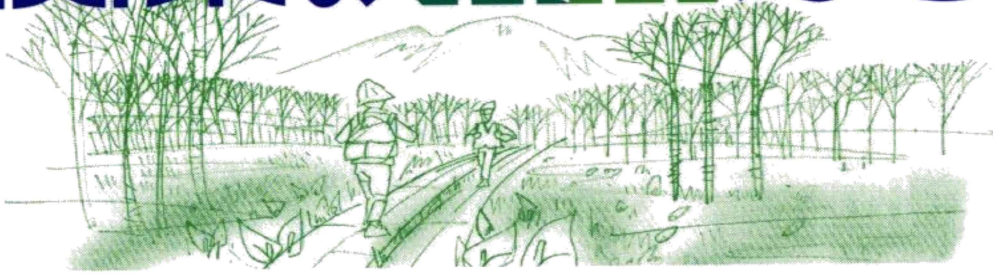


令和元年 8月 1日

第182号

# 関東の森林から



国民の森林・国有林

関東森林管理局

前橋市岩神町4-16-25  
TEL.027-210-1158

<http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/>



## 「霊峰白山と慈光寺」(新潟県五泉市)

(撮影：関東森林管理局 下越森林管理署)

- ◎ 3署で連携 八溝山周辺国有林  
『ニホンジカ対策協議会』発足 棚倉署、塩那署、茨城署、保全課・・・2
- ◎ 『銚子ジオパークの森』 銚子の君ヶ浜国有林  
千葉森林管理事務所・・・4
- ◎ 赤谷の森から  
赤谷森林ふれあい推進センター・・・5
- ◎ 森づくり最前線  
磐城森林管理署 富岡森林事務所 地域統括森林官 今坂典久・・・6





センサーカメラに写ったニホンジカ（茨城署）

本協議会は、茨城森林管理署が事務局となり、棚倉、塩那、茨城の3森林管理署のほか、関東森林管理局保全課、日光森林管理署、福島森林管理署、福島森林管理署白河支署を

山地域へ拡大していることが確認されています。また、シカの生息が確認されていなかった茨城県側でもセンサーカメラで個体が撮影されています。撮影個体にはメスジカも確認されおりニホンジカの生息域拡大の懸念がさらに大きくなっています。

植栽木への食害や立木へ剥皮被害等をもたらすニホンジカから八溝山地域の森林を守ることが急務となってきた状況や踏まえ、八溝山周辺の国有林を管轄する棚倉森林管理署、塩那森林管理署、茨城森林管理署の3森林管理署は、広域的な監視体制の整備や今後のシカ対策の検討及び情報交換を定期的に行うため6月25日、「八溝山周辺国有林ニホンジカ対策協議会」を設立しました。

福島、栃木、茨城の3県境にまたがる八溝山と周辺地域は良質なスギ・ヒノキ材が産出され、林業・木材産業が盛んなことで知られています。しかし、近年シカの生息密度が低いとされてきた福島県側でセンサーカメラによる撮影頻度が高まり、栃木県側では生息域が県西部から八溝

**3署で連携 八溝山周辺国有林  
『ニホンジカ対策協議会』発足  
棚倉署、塩那署、茨城署、保全課**



八溝山周辺国有林ニホンジカ対策協議会設立

オブザーバーとし、シカ対策の検討にあたり適宜専門家を交えた会議や現地検討会等も実施していくこととしています。

当日の協議会は棚倉森林管理署で行われ、はじめに棚倉森林管理署長、関東森林管理局保全課長の挨拶に続き、設立総会が行われました。その後、局、署等からそれぞれの取組の発表がありました。

棚倉森林管理署からは、昨年度から設置しているセンサーカメラの撮影状況や目撃情報など、管内でも顕著にシカが増えている状況の説明があ



取組事例発表の様子（茨城署）

りました。

塩那森林管理署からは、栃木県西部の国有林で実施しているシカ捕獲事業の取組事例や、シカ被害対策には多額の経費を要するため適切な森林整備に支障をきたし、新たなシカの侵入を防ぐことが最重要であることの説明がありました。

茨城森林管理署からは、県内のシカ関連の情報提供や、茨城県の関係部署の取組、福島県・栃木県・茨城県の3県が連携した協議会の設立に





センサーカメラ（棚倉署）

ついでの説明がありました。  
 午後からは、オブザーバーの3署等からそれぞれの署のシカ対策の取組について説明があり、関東森林管理局からは、赤谷森林ふれあい推進センターで実施した低密度管理試験の取組事例などの紹介がありました。  
 各署等からの発表後、意見交換を行い、参加者から、生息状況調査においては、職員の分析では限界があるため、今後は委託により調査量や分析の精度を上げていくことなどの意見や、自治体や研究者等と連携しながら今後のシカ対策を進めていくことの必要性など活発な議論のほか、現地の食害などの動物によるものなのか判断する資料や勉強の機会がほしいなどの要望があり、参加した各署等のシカ対策への意識の高まりを伺える協議会となりました。



八清山周辺国有林二ホンシカ対策協議会

また、当日はテレビ局2局を含むマスコミ9者が来場し、関東森林管理局、茨城森林管理署、塩那森林管理署が取材を受け、地域全体でシカ対策を行うっていくことの重要性を呼びかけることもできました。  
 今後は、地方自治体や専門家を交えた協議会や現地検討会などを開催することと併せて、地方自治体が開催する会議等に積極的に参加して情報共有や対策検討を行い、生息調査や目撃情報によるシカの移動経路の分析から有効な対策を検討し実施していくなど、地域と連携した取組を進めていきたいと考えています。

## 今月の表紙

### 「霊峰白山と慈光寺」

（新潟県五泉市）



下越森林管理署の村松森林事務所は五泉市を管轄しており、管内の国有林には、白山・菅名岳・大蔵山など標高900mから1,000mを超える山々が連なっています。毎年4月下旬から山開きが行われ、多くの人々が登山やハイキングに訪れています。  
 菅名岳・大蔵山の中腹にはブナの原生林やカツラの巨木が植生しており、古くからの手付かずの自然を見ることができます。  
 また、これらの山々では、諸説ありますが、五泉市の由来となる清水が至るところから湧き出ており、中でも菅名岳中腹にある「どっぱら清水」はその名の通り、山の斜面に開いた穴から水が湧き出ており、寒九の日（寒の入りから九日目。1月の中旬頃）には、清酒の仕込み水を汲む行事も行われています。  
 霊峰白山には大蛇伝説や天狗伝説も残っており、麓に座する曹洞宗の古刹慈光寺は、明治以前の地名が「滝谷」だったことから、地元では「お滝谷さん」と親しまれ、毎年多くの参拝者が訪れます。





# 『銚子ジオパークの森』 銚子の君ヶ浜国有林

千葉森林管理事務所

7月3日、銚子市役所において、銚子ジオパーク推進協議会（会長・銚子市長 越川信一氏）と千葉森林管理事務所は、国民参加の森林づくりによる「銚子ジオパークの森」の協定を結びました。

本協定による活動の目標は、千葉県最東端に位置する「君ヶ浜国有林（29.5ha）」について、



千葉県最東端 君ヶ浜国有林

銚子ジオパークの「ジオサイト」の一つとして、市民や観光客に親しまれる森林となるよう、定期的に美化活動を行い景観を保全し、特有の地形や植生から地域の自然・歴史・文化を学ぶ等環境教育のフィールドとして活用することとしています。



協定締結調印式

## きのこ特集

【ナラタケの方言】

ナラタケ（食用）  
（キシメジ科 ナラタケ属）



ナラタケ属のきのこの和名は、ナラタケ、ナラタケモドキ、ヤチヒロヒダタケと大きく分けて三種類ですが、近年は、ナラタケを細かく細分類し、ナラタケ、ヤチナラタケ、キツブナラタケ、オニナラタケ、ワタゲナラタケ、ヒトリナラタケ等に分類されています。全て食用きのこですが、味に違いがあり、美味しい物、美味しくない物とがあります。

ナラタケは、昔から親しまれてきた食用きのこなので、各県で色々な呼び方があります。

では、その一部を紹介します。

北海道…ポリポリ

青森県…サモダシ、ツバモダシ

秋田県…ナメラッコ

…オニサモダシ

山形県…オリミキ

岩手県…ポリメ、ポリメキ

栃木県

（日光地方）…ジヨウケンボウ

群馬県…モタセ

埼玉県…ナラセンボン

神奈川県…クリノキモダシ

新潟県

（上越地方）…モグラ

（長岡地方）…アマンダレ

（三条地方）…カワゴケ、ポッキー

長野県…モトアシ

兵庫県…ユタケ

など、色々な地方の方言がありますが、標準和名はナラタケです。



オニナラタケ



キツブナラタケ





【桐の植栽で地域の新たな繋がりを  
つくる】

赤谷プロジェクトは、地域の新たな繋がりをつくる桐の植栽を行っています。

赤谷プロジェクト地域づくりワーキンググループでは、赤谷プロジェクトの目標の一つである持続的な地域づくりのための取組として、みなかみ町内にある群馬県唯一の桐筆業者「桐匠根津」との連携により昨年度から桐の植栽を検討してきました。



福島県三島町訪問時の様子



仮植作業

近い将来、みなかみ町で生産された桐材が地元の木工業者に活用されるという繋がりを夢見て、昨年12月には、みなかみ町役場や地域協議会メンバーなどのワーキンググループ関係者が視察で訪問した桐の有名産地である福島県大沼郡三島町から、2年生と3年生の桐の苗を合わせて20本提供していただき、冬の間、一旦仮植しておいた苗を、雪解け後の4月に試験的にいきもの村に植栽することにしました。

4月7日、赤谷の日の2日目に、赤谷プロジェクトを支援していただいている(株)ラッシュジャパンからも7名のサポーターが参加して、



芽掻き作業

施業管理については、当面の管理

(公財) 日本自然保護協会、赤谷プロジェクト地域協議会、赤谷センター職員ら総勢20名により県道に隣接するいきもの村の旧苗畑跡地に桐を植栽しました。

また、5月の赤谷の日には「芽掻き」と呼ばれる作業を行いました。この作業は、桐が真っ直ぐ育つよう伸びてきた新芽のうち、3年生苗は樹高2m以下の芽はすべて掻き取り、2年生の苗はすべての芽を掻き取ります。なお、新芽が出てきたら繰り返し行う必要があります。

桐は他の木と比べてかなり成長が早いので、最初から植え付けの間隔を約5mと広めにしています。そこで、いきもの村に自生しているクロマジなど、森の恵として利用できる植物を隙間に植えたりして増やすことも計画しています。



植付作業

を定めた計画書を策定し、草刈りや芽掻きなどの作業は、赤谷の日にサポーターと一緒に、それ以外は地域協議会のメンバーが実施しています。桐は5年生で花が咲くといわれています。早ければ再来年の春には花見ができるのではと楽しみにしているところです。



植栽地の様子



# 森づくり最前線

磐城森林管理署

富岡森林事務所

地域統括森林官 今坂 典久



本来の庁舎が危難困難区域にあるため、現在は検察庁の庁舎を借りています

富岡森林事務所は、東京電力福島第一原子力発電所（以下「第一原発」という。）の事故を受け閉鎖していましたが、昨年4月1日に再開し、双葉町、大熊町、富岡町及び楢葉町の一部の国有林約7,700haを管理しています。

当管内は、太平洋側気候に属し、冬でも雪が少なく温暖であるため、木の生長が良く、昔から林業が盛んに行われていました。昭和の高度成長期の頃は、天然林を伐採して人工林とする拡大造林が盛んに行われ、多くの木材が搬出されてきました。特にモミは、特産品の「磐城モミ」として出荷され、その頃の面影を今でもモミ展示林に見ることが出来ます。



展示林のモミ

た、解除区域内であつても、線量が一定値を越えるとならば、線量測定の結果、整備を要する。また、線量測定の結果、整備を要する。また、線量測定の結果、整備を要する。

平成になってからは、天然林の伐採がなくなり、伐採量は減りましたが、拡大造林の結果、管内国有林の6割がスギ・ヒノキを主体とした人工林が占めるようになり、森林整備が盛んに行われていました。

森林整備を再開すると、7年間のブランクは大きいことも実感しています。林道は通行不能の箇所が多いうえ、植栽箇所は、下刈ができません。そのため、植栽木の見分けがつかない程の状態となっている箇所もあります。

このような状況が、平成23年3月、東日本大震災による第一原発の事故により一変しました。当管内は、第一原発から20km圏内にあたるため、避難指示区域の指定を受け、森林整備が一切できなくなりました。

森林整備の担い手不足も問題です。地域住民が移住してしまつ

平成27年に楢葉町、平成29年に富岡町（一部を除く）が、避難指示区域から解除されたことに伴い、ようやく当管内でも昨年4月から7年ぶりに国有林での森林整備が再開されました。現在でも、管内国有林のおよそ13%、1,000haが帰還困難区域として立入できません。ま



植栽木の状況

(左側：除伐なし 右側：除伐済)

発行所 関東森林管理局  
編集 総務課  
TEL (027) 210-1158  
FAX (027) 230-1393



ミヤマカワトンボ(深山川蜻蛉)  
約7cm、きれいな川の水に住む、日本最大のカワトンボ。  
今の川の水はきれいな水で、長い脚で餌の虫を捕まえる。

たため、山を守る人がおらず、唯一事業を請負う森林組合さえも、地元作業員は移住し、作業現場まで1時間以上かけて通勤している状況です。

このような前代未聞の状況の中、国有林には先頭に立つて地域の林業を引っ張っていくことが求められています。森林整備を積極的に実施して、健全な森林に戻すとともに、安全な木材が供給できることを示していきたいのですが、地域の期待にこたえられないよう、頑張っていきたいと思